

ありがとうおじさん

滋賀県の山中に、「ありがとうございます」という感謝の祈りに徹した生活をされている「ありがとうおじさん」と呼ばれる方がいるそうです。

毎日毎日、何ごとにつけ「ありがとうございます」という感謝のことばを話すのですが、ただ感謝の気持ちを伝えるのではなく、祈り言葉的に繰り返し、繰り返し唱え続けるのです。

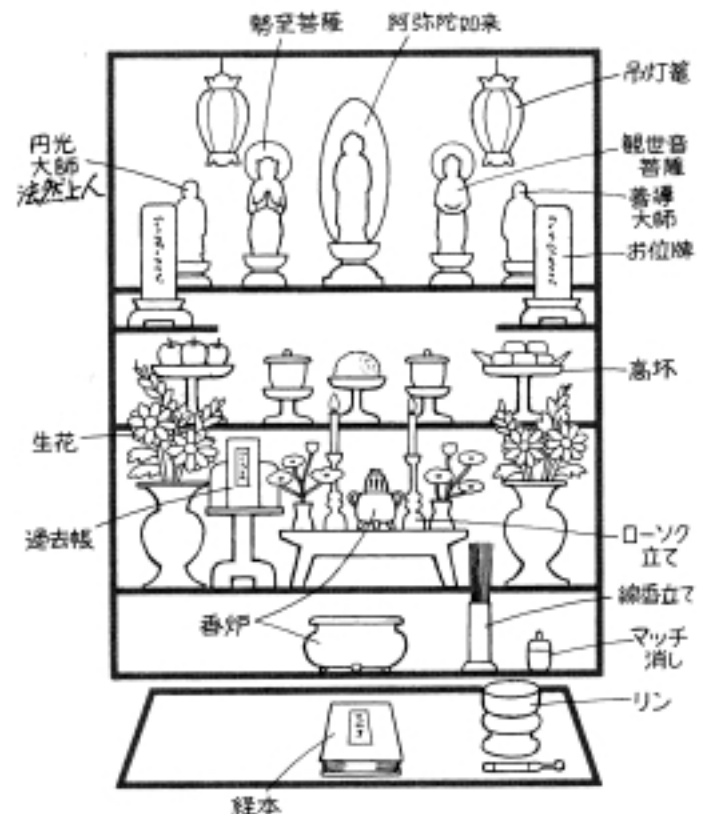
この「ありがとうおじさん」は3歳の時から神棚の前で座禅をしていたそうですが、20才の時からは1日に5万回以上の「ありがとうございます。」を唱え出したのです。すると三ヶ月目に周りが全部輝いて見えたといいます。空気も石ころも草木も、すべて輝いてみえたのです。

この「ありがとうおじさん」のお父さんという人は資産家の家に生まれ財産をひとりで受け継いだのですが、放蕩の挙げ句に財産を使い果たし、肺結核にかかって死ぬような状態になって奇跡的に一命をとりとめた人です。しかし、その後は信仰深い生活をおくりました。

「ありがとうおじさん」は貧乏な暮らしをしましたが、その大変ななかでも「お祈りだけをしたい」という気持ちを大切に生活をしていくと、どんな状況でも不思議と不自由なく暮らせるようになったんだそうです。

「ありがとうおじさん」によると『神仏でも人でも、お礼の最後に「ありがとうございます」と付けるでしょう。この最後につけるとするのがものすごいことですよね。表には出てないけど、陰で全部守りきっているという感謝の言葉です。だから神様になるんです。私はこれまで何億回と感謝行を続けてきて、いま、「ありがとうございます」は「新たな全徳の無限の無限の輝きがいっぱい!」という意味でとなえているんです。無限の輝きがいっぱい出てきても、その奥に無限の輝きがいっぱいある。つまり「ありがとうございます。」の一言に底知れない輝きがあって、唱えることによってそれを感じ取ることができるんです。』ということです。

篤く三宝を敬え 三宝とは
仏、法、僧なり
仏.....いのちの親
法.....不可思議な力
僧.....仲間達



浄土宗の仏壇の祀り方です

五重相伝会を行います。

無量寺では、来る平成16年4月20日(火)より24日(土)までの5日間行います。参加者を募集致します。応募していただける方は、年齢や性別は問いませんが、5日間出席できる方です。一生に一度あるかないかのこの機会に、是非参加して下さいますよう御案内致します。

だるまを学んで、ダルマサンポイント



年間法要のお説教を最後まで聴聞された方、念佛講、14日会に参加された方にだるまさん証書をお授けしています。

ポイント制になっています。将来お戒名などにも反映されます。

なるほど浄土宗 五重相伝(ごじゅうそうでん)

浄土宗の教えの神髄を相伝する法会で、専修(せんじゅ)念仏の教えが正しく、誤りなく次代へと伝えられていくための法会です。五重というのは五通りの説明(意義)を重ねてもれなく念仏の一大事をお伝えするから五重相伝会というのです。期間は八日間で、前六日目が前行(ぜんぎょう) 七日目が正伝法(しょうでんぼう) 八日目が御礼礼拝(おれいらいはい)となっている。近時は期間を短縮する場合があります。現在は五日間でするところが多くなっています。

初重(しじゅう) 法然上人作といわれる『往生記』によって、念仏を申して往生する人の機根についてのべる。

二重(にじゅう) 浄土宗第二祖聖光上人御作の『末代念仏授手印』によって五十五の法数(ほっすう) - をあげて浄土宗の安心(あんじん) 起行(きぎょう) 作業(さごう) 三種行儀等について、法然上人より承った通りにのべている。

三重(さんじゅう) 『領解末代念仏授手印鈔』略して『領解鈔』(りょうげしょう)といい、浄土宗第三組の然阿記主(ねんなきしゅ)禅師の御作で、前述の「授手印」の述べるところがよくわかりましたということが記されている。

四重(しじゅう) 然阿記主禅師の御作『決答授手印疑問鈔』略して『決答鈔』といい、念仏信仰を続けているうちに起ってくるいろいろな疑問に対して明快な解答を与えている。

第五重(だいがじゅう) 『往生論註』に説かれている口授心伝(くじゅしんでん) または「十念伝」といわれる。これだけでは五重とまちがえるので、第五重と第をつける。

電磁波

宇宙は如来の願業力に保たれてある世界、無限の空間(ひろがり)の中に見える不可思議の力(願業力)の連続(時)と受け止めさせていたでているのであるが、この時に歴史を見て中国の春秋戦国時代・日本の鎌倉・室町・桃山・江戸へと武士と戦の時代、そして二十世紀の世界大戦と戦いの歴史を眺めて見ると、地球という星の陸の一部の空間が戦いの思いで満たされ、そしてその時に生まれた人間が当然の想念として戦いの本望と呼べる生き方をしたのであり、歴史の事実があつて、同時に時と共に消え去つた思いでもあろう(破戒と再生の繰り返し)。この陸地の部分的な戦いの本望が世界の民族の歴史に残り、そして二十世紀には地球規模の大戦の中に地球が包まれた。地球を戦いの本望が包み込んだとも言えるであろう。人類の歴史・物語とも言うべきか、人は思いに依りて移り変わるとしたら、一番大切なことは人の想念を清浄に保つということが判るのである。七仏通誡偈の中に、諸悪莫作・衆善奉行・自淨其意・是諸佛教・と示されている。この事は人類の指差として受け止めるべきであろう。又、念仏は清浄一法句として仏の願いの全てが込められているとも言われているのである。歴史を見通して人類救済への願いの込められた、弥陀のお慈悲の南無阿彌陀佛の口称念仏の本願がしめされているのであるが、この様な見方・受け止め方をして下さる人がいるのであるうか、地中海文明と日本海文明という

ことについて考えて見ると大変面白い見方が出来るのではなからうかと私は思う。キリスト教という神の宗教は地中海文明に依り、古神道という神の宗教は日本海に依り、それぞれが古代に歴史を持ち、そこに舟という乗物があつた。この舟に乗つて海を旅する。夜空の星の光をたよりにしてまだ見ぬ国に旅立つ時、何かの力を依り処としなければ心は強くなれない。神の力を借りて勇気を持つなればこそ、星の光を通して宇宙に漲る力に励まされてこそ人は活る。正に神の力に依りて、舟は浮力で海を進み、人は今や空に宇宙に飛行機・ロケットの揚力・推力で飛び交う時代と文明を築き上げた。

宇宙船に乗つて旅した宇宙飛行士は地球という人類の想念に包まれた星から弥陀の大願業力に満たされた宇宙空間に出た時、神の存在を感じて宗教者なつた人がいると、陸に於いても植物は数百年、中には数千年も生命の営み中に在るもある。太古の木が今もある。これは宇宙よりのエネルギーと地球のエネルギー一直線上に生命の綱が結ばれての不思議と思われる。無理のない自然の姿、法に任せ切つての出来事であろう。数年、数百年、数千年と時を重ねる毎に植物は智慧を宿してよりに法に近づく時に寿命が伸びていくのである。二十世紀、人は天体望遠鏡・顕微鏡という道具を使つて宇宙を探究し生命を探究し、そして目に見えぬエネルギーを電気を電子を法則として利用する方法を発見して、今や自然に存在する状態を越えてしまい、地球は正に電磁波に包まれてしまつていゝのではと思ふ。これは大切な、一番大切な神のエネルギー、宇宙に漲る大願業力を障る人類の営みである。これによつて神仏の計らいから外れ狂気の犯罪が生じる世紀であると判る。實際世

の中の出来事は狂つていゝのではと思ふ。この様に考える人はいないのであるうか。時代の子は電磁波の子として神仏の加護に漏れる人格が形成されるであろう。この様な時代にこそ人は肌の温もり、親子の情愛に依つてこそ人間性を取り戻さねばならない。赤ん坊の時、抱いて育てるべき時にこそ、抱いて抱いて抱きぬく親子の情を人間は宝としなければならぬ。坐禅の脳波を研究している人がいるという事であるが、生命体は外界にエネルギーを放出しているという事、現代科学では測定可能であるという事、これは外界からの強いエネルギーに依つては影響を受けるといふことになる。深山にわけ入り、海の波の音を聴き、夜空の星の輝きを見たりすると身心が安らぐといふことは、外界のエネルギーに私達が左右され易いといふことである。今の時代は天地の間に立つ時第三のエネルギー(電磁波)に依つて私達は左右されたり影響を受けることがある。人間は想念の在り方を良く良く考える必要がある時代であろう。

季節が来れば

夏休みの前日、二男が朝顔を学校から持帰り、毎日庭で水をやり花を咲かせている。紫色の花である、上の子達も同じ様にしていたものだ。今年になつてふと考へて見た。種子を播いて芽が出て蔓が伸びてその先に荳が次から次と花開き、実を結ぶ、そして中に種子が出来、又播いて繰り返して楽しむことが出来るのであるが、考へて見れば不思議である。種子の中に全ての営みが内蔵されているといふこと、水と光と温度、そして季節に依りて内蔵されている働きが自然と表われて、私達にその不思議の出来事を気付かせること

となく楽しませてくれるのである。草花もそうであるならば、木も又然りである。栗の木に花が咲き、秋に実を結ぶ、大変美味しい、栗おこわにするとう格別、用い方に依つて様々な食物となる。一本の木が季節がくる度に実を結び続け、その実を土に播けば芽を出し三年程で実を結ぶ、この全ての出来事を種子(実)の中に内蔵している。植物の種子の中に全ての営みが内蔵されて季節が来れば内蔵されている全てを私達に見せてくれるといふこと。

最近遺伝子のヒトゲノムが九割以上解明されたテレビ・新聞で報道されたが、これは医学的に人間の病気や寿命を考へて役立てたいといふことから研究されているのである。私達は年齢が来れば、自分が自分の遺伝子(種子)に依つて自然と自分になりきることが出来る筈であり、病も遺伝子の中から自然に出てくるものである。だから遺伝子(種子)操作に依つて病に克ち寿命を長く保ちたいと願うのは人間の願望として必然的なものである。然し乍ら年齢(季節)が来れば親と同じ病をして同じ様に死ぬ可能性が高いとしたら、人間は考へざるを得ない。植物と動物と人間を比較してみると種子に内蔵されているだけの象が表われるとすれば、人間社会と人生模様を歴史を重ねて二千年・三千年・五千年と逆戻り、自分の父母その父母その何十代か戻つてみると自分の種子の中に内蔵されている事の全ては不可解であり、自分の事が自分に判るのであるうか。さらに子孫の行末を何十代と思い計り自分の種子が後の世の生命にどれだけの力になることが出来るのかと考へると、過去にも未来にも私自身は億と超える生命のなくてはならない一人となる。過去(受るもの)より未来(及ぼすもの)の億々の人格に關与している自分に

目覚めるならば、生きるということの難しさは薄氷を踏むが如きであろう。この億々の受及を業といふならば、私達の種子(遺伝子)に内蔵された働きを正面に見据て、これを如何に解決(正常のすがた)すれば、私達は真理と一体になれるであろうかと、私一人が過現未の億々の人に負つべきを正す方法は何であろうか。どうすれば良いのであるうかという考へに到つた時、自分一人が解決出来た時、全ての人間のいのちも共に救済されるのである。

私はこの事より、法然上人四十三才の春、元黒谷報恩感にてほとばしらせし高声の念仏と頼を伝う涙の中の出来事を思わずにはいられない。念仏とは彼の佛の願に順ずるが故に業が正しく定まる唯一の真理として心に響いたのである。亡き父の遺言を心の問題の正面に据え置き、それを自分の心の問題として取り組む事が出来た人なればこそ、一声の南無阿彌陀佛の中に全てを解決出来たのである。この人間的心の有り様こそが人類救済の心の有り様であろう。過現未の佛の心が衆生の心に「めでたき心」よと歎えずにはおられぬ心を私達は考へるべきであろう。

自己を見つめて宇宙を識るの生き方か、目を閉じて眼前にみ佛を想う心のやすらぎか。風の音や水の音、佛の聲と聞き分けて萌生命の金色を見つむれば、大いなる生命の親様よ「彼佛今現在説法」満面にほとばしる不思議の力に充されて湧き出る慈愛の心に念ずる心の波は大きく唸るべし、心に聞ゆる法の聲。

南無阿彌陀佛